

## 審査の結果の要旨

審査日：2013年2月21日

題目：中国吉林省におけるトウモロコシ産業——アクターの変化と地域経済の発展

氏名：張馨元

本論文は、吉林省のトウモロコシ産業を事例に、同産業が2004年の農産物流通体制自由化以降、短期間のうちに成長を遂げた理由を、政府の政策だけではなく、生産農家、加工業者、流通商人・企業の個々の主体的な活動と相互の有機的關係の構築に求め、これを詳細な文献調査と現地での実態調査をもとに実証した研究である。

中国経済は1980年代以降、目を見張る発展を遂げてきた。この過程で中央政府が目指したのは、工業化の推進と産業構造の高度化だけではなく、いわゆる「三農問題の解消」（農業における増産体制の確立、農村と都市の格差是正、農民の所得向上）であった。この「三農問題」については、すでにいくつかの優れた研究が日本でも存在する。本論文で著者は、この問題を検討するにあたって、全国レベルではなく吉林省という特定の地域を選び、また、食糧としてのトウモロコシではなく、加工産業を含めたトウモロコシ産業全体を研究の対象としている。

著者がトウモロコシを選択したのは、その生産量がコメに次いで第2位になっていること、作付面積は小麦、コメを抜いて、2007年以降は中国最大の作物になっていること、さらにトウモロコシの消費は食用だけでなく、飼料や燃料エタノールなどの工業部門の原料として、近年急速な伸びを示していることによっている。また、吉林省は全国有数のトウモロコシ生産地であり、トウモロコシ産業は自動車産業、石油化学産業と並んで吉林省の地域経済を支える主要産業のひとつでもある。したがって、吉林省のトウモロコシ産業を取り上げることは、決して特殊な事例研究に留まるものではなく、特定産業の発展と地域経済の発展の相互關係を考察する上で、一定の普遍性を有する課題設定であると言えよう。

本論文の大きな特徴は、トウモロコシ産業を政策、生産、加工、流通の4つの部門からなる産業と捉え、その産業の発展を各部門の経済主体（アクター）の活動、すなわち政策の担い手としての地域政府（省政府）、トウモロコシ栽培農家、飼料やエタノールの生産に従事する加工業者、經紀人と呼ばれる仲買人や国有・民間の食糧流通企業の4部門のアクターたちの経済活動と、各アクター間の相互關係に焦点をあてて明らかにしようとした点にある。とくに、従来十分紹介されてこなかった加工業者や流通業者の実態を、度重なる現地での聞き取り調査やアンケート調査で明らかにした点は、高く評価することができる。また、中央政府が提唱するアグロインダストリーの振興（「農業産業化」経営の推進）が、地域でどのような展開を示しているのかを理解するうえでも、重要な情報と示唆を与えている。

本論文は中国の農業と地域経済の発展の研究に対して独自の貢献を行っており、審査委員会は、著者が十分に高い研究能力を有しており、博士号（経済学）を授与するにふさわしいという結論に達した。

以下、本論文の内容を章ごとに手短かに紹介する。なお、本論文は序章、本文（5つの章）、終章の計7章と第3章に付された補論からなる。

序章では、本論文の問題関心と、なぜ吉林省のトウモロコシ産業を取り上げるのかが示される。トウモロコシが、生産、作付面積、消費のいずれをとっても中国農業の中で重要な地位を占めているだけでなく、1990年代以降の需要構造の変化の中で、飼料、デンプン、アルコールの原料としての需要が増え、これがトウモロコシの生産を一層促してきたこと、したがって、トウモロコシを研究対象とする場合には、穀物ではなく加工業を含む「トウモロコシ産業」として、その発展を検討する必要性があることが指摘される。

第1章では、本論文の研究視角と方法が提示される。まず、著者は本論文に関係する3つの分野の既存研究を整理し、批判的に紹介する。具体的には、①中国の農業・農村問題に関する研究、②中国以外の諸国のアグロインダストリーの研究、③中国におけるアグロインダストリー（農業産業化）に関する研究である。著者が関心を寄せるのは②の研究であるが、これらの研究は、もっぱら輸出向け農畜産物の加工産業（ブロイラーなど）の研究であり、国内に市場を持つ中国の事例とは異なっていること、したがって、中国におけるアグロインダストリー研究は地域経済との関連をより重視すべきであると指摘する。

その上で著者は、本論文の研究課題として、小規模経営を主たる担い手とするトウモロコシ産業の発展と地域経済の発展の関係をより明確にすることを掲げ、そのことを通じて、中国が抱える農業・農村問題の解決策について新たな示唆を得ることを本論文の最終目的とする。一方、研究視角については、トウモロコシ産業の政策、生産、加工、流通の4つの部門全体を対象とし、各部門に従事するアクターの活動の実態とアクター間の相互関係を明らかにするとことを目指すと述べる。

第2章では、中央政府と吉林省政府（地域政府）による農業政策とトウモロコシ政策の変遷が、多数の先行研究や政府の政策文書をベースに紹介される。最初に著者は、中央政府の農業政策について、①食糧不足期（1949年～1978年）、②食糧増産期（1979年～1995年）、③食糧不足解消期（1996年～現在）の3つに時期区分した上で、それぞれの時期の政策内容を要約し、それに対応させる形で、吉林省のトウモロコシの生産、作付面積、単位収量の長期トレンドを検討する。吉林省のトウモロコシ生産は全国と同様、1960年代以降増加していったが、とくに同省の特徴は、1970年代以降、種子改良などによって単位面積当たり収量が全国平均を上回り、1998年には全国の1.5倍にまで達した点であるという。

一方、食糧増産期に入ると、トウモロコシの買付と流通体制が、急増する生産に追いつかず、吉林省は「食糧販売難」に陥り、1990年代にはこの問題が深刻化していった。同じ時期、吉林省政府は中央政府の「農業産業化」経営の推進を念頭において、地域独自のトウモロコシ加工産業の振興を図るが、この場合でも、流通部門の改革は対象外であった。その結果、トウモロコシの生産量は増加し、加工業も発展を遂げたが、農家収入の方は向上しないという状況が生まれた。こうした状況を変えたのは、2004年以降に導入された農産物流通自由化体制であり、これによって初めて「生産—流通—加工」の間に有機的な連関が生まれたと、著者は指摘する。

第3章では、4つの部門のうち「加工」を担当する加工業者の実態が、工場訪問調査の結果も踏まえて検討される。著者は、トウモロコシ加工部門を「伝統セクター」（食用と飼料）と「新興セクター」（デンプン、アルコール、燃料エタノールなど化学工業）の2つに分け、双方について生産工程の技術的説明、地域政府の奨励政策の紹介、生産・消費統計の時系列的整理を行ったあと、生産規模の大きい16社の企業について、その資本所有、経営形態、事業の多角化などについて検討を行う。また、伝統セクターを代表する企業として吉林徳大有限公司（タイの多国籍企業CPグループ）と吉林天景食品有限公司の2社を、新興セクターを代表する企業として中国糧油控股有限公司、大成生化科技集团有限公司、吉林燃料エタノール有限責任会社の3社を取り上げ、詳しい分析を行っている。

個別企業にまで踏み込んだ分析の結果、①トウモロコシ消費の面では、新興セクターである化学工業が飼料産業をすでに大きく凌駕していること、②16社のうち外見上は8社が「外資系」に分類できるものの、外資が経営権を支配しているのは、先のCPグループの子会社と米国カーギル社の子会社の2社のみで、地場資本が中心であること（他のアジア諸国では外国資本の影響が強い）、③トウモロコシ加工以外に事業を多角化している事例が多いこと、④工場立地がトウモロコシ栽培地に集中していること、以上の4点を加工業の特徴として指摘している。

この第3章には「補論」が設けられており、穀物としてのトウモロコシ（輸出から輸入へ）、飼料・畜産品（純輸入）、トウモロコシを原料とする化学工業品（純輸出）のそれぞれの貿易統計が、時系列的に提示される。とくに穀物としてのトウモロコシの貿易動向については、中央政府の需給調整の影響が大きいこと、2010年以降の輸入の増加は、北部主産地のトウモロコシ価格の上昇に伴い、原料確保が困難となった南部沿岸地域の飼料生産企業に対する政府の支援的側面が強いと指摘される。

第4章では、4つの部門のうち「生産」を担当するトウモロコシ栽培農家の経営実態が、さまざまな農業統計資料と本人による現地での2つの農村におけるアンケート調査をもとに検討される。著者は、1990年以降の農家経営の指標を使いながら、吉林省のトウモロコシ生産農家の収益は全国平均より低かったこと（高い土地生産性を維持するため、より多

くの農業生産財を投入)、しかし、一労働日当たりの収益は全国平均を上回り、吉林省内の露地・ハウス栽培よりも高かったことを指摘した上で、2005年以降のトウモロコシ販売価格の上昇のもとで、トウモロコシ生産が吉林省の農家経営において最も重要な活動になっていること、副産物であるトウモロコシの茎が農家の生活用燃料に使用され、これが農家経営の安定につながっていること、さらに、所得の向上を図るために、トウモロコシ生産農家では複合経営や農外活動も行っていることを指摘する。

本章における著者の主張は、吉林省の農民がトウモロコシ生産を続けるのは、もっぱら地域政府の政策の結果ではなく、農家自らが主体的に経営の安定性と所得の向上を目指した結果である、という点にある。ただし、あとで述べるように、こうした状況が2005年以降のトウモロコシ販売価格の上昇によって支えられている点も無視すべきではなかろう。

第5章では、4つの部門のうち「流通」を担当する流通業者が、「經紀人」と呼ばれる仲買人、国有食糧企業、民間食糧企業に分類されたうえで、個別に検討される。とりわけこの章で興味深いのは、農民でありながら農産物流通に係っている「經紀人」の役割である。

著者は、自身の聞き取り調査やアンケート調査に基づきながら、その取引の実態、買付価格と収益、信用関係（ほとんどが現金決済で、金融機関は関与しない）を紹介したあと、經紀人が栽培農家と加工業者を結びつける上で重要な役割を果たしていることを明らかにした。また、2004年以降の農産物流通自由化のもとで、国有食糧企業の役割が、従来のトウモロコシ買付機能から市場価格の底支えや需給バランスの調整に移行したこと、これと並行して、民間食糧企業の数と取引量が増加したことなどが、具体的に記述される。そして、1990年代に深刻化した「食糧販売難」時代に、機能不全に陥った政府の流通体制の間隙を縫って登場した仲買人や民間企業の活動が、その後の農産物流通自由化体制への迅速な移行と定着を助けたという、独自の見解を述べている。

第6章では、第2章から第5章にかけて検討してきた4つの部門の相互関係がどのように発展してきたかが検討される。著者は、①政策部門と生産部門、加工部門間の関係を「政策を通じた相互連関」（政策的連関）、②流通部門と生産部門、加工部門間の関係を「市場を通じた相互連関」（市場的連関）と名付け、2つの相互連関が吉林省のトウモロコシ産業の発展にどのように貢献したのか、あるいはしなかったのかを検討する。

例えば、1980年代後半以降、吉林省政府は「農業産業化」経営の推進という観点から加工産業の振興を進め、そのため原料となるトウモロコシの増産政策をとった。しかし、この「政策的連関」はトウモロコシの増産につながったものの、流通部門の未発達（市場的連関の欠如）のために、農家所得の向上や生産農家の経営の安定化にはつながらなかったと、著者は主張する。そして、吉林省のトウモロコシ産業が本格的に発展するためには、政策的連関と同時に、市場的連関が形成される2004年以降の農産物流通自由化体制の確立を待たねばならなかったこと、逆に、この流通自由化を核とする市場経済化の進展が、生

産、加工、流通の間に有機的連関を生み出し、トウモロコシ産業の成長を促したと結論づける。

終章は、結論と今後の課題の説明にあてられている。著者は、序章で提示した 3 つの課題について、まず回答を与える。第一に、吉林省のトウモロコシ産業の急速な発展は、2004 年以降の「政策的連関」と「市場的連関」の同時的な成立によること。第二に、生産農家の所得向上を伴うトウモロコシ産業の発展のためには、生産・加工・流通の各アクターたちがそれぞれの経営目標を実現するうえで多様な選択肢を持つようになり、かつ競争的な環境に置かれたことが重要であったこと。第三に、地域経済の発展との関係では、小規模農家でも加工産業（アグロインダストリー）の発展と流通部門の発展があれば、リスクに自ら対応しえる安定的な農家経営を実現できること。以上の 3 点である。また、吉林省の農家の半分以上がトウモロコシ生産を選好しているのは、こうした条件が形成されたからであると、著者は主張する。

一方、今後の課題については、本論文で十分検討してこなかった 2 つの外的要因の存在が指摘される。ひとつ目は、全国的で長期的な食糧需給の趨勢が地域経済に与える影響であり、もうひとつ目は、原料であるトウモロコシの輸入が増加した場合、加工産業のトウモロコシ生産地区から港湾のある沿岸地区への工場立地の移転がもたらす影響である。これらの影響を具体的に分析していくためには、国際的な食糧需給の動向を視野に収めることが必要であるというのが、本論文の結びの言葉である。

以上が本論文の内容の概略である。本論文の学術上の意義と貢献は次の 4 点にある。

第一は、吉林省のトウモロコシを、飼料産業や化学工業からなる加工部門を含めた「トウモロコシ産業」として捉え、その発展のプロセスと条件を探ることで、地域レベルにおける「三農問題」の解消に一定の政策的示唆を与えている点である。とくに、「農業産業化」経営（アグロインダストリー）の推進が、どのような「条件の成立」（政策的連関と市場的連関）と「環境の整備」（多様な選択肢と競争的な環境）のもとで、地域経済の発展に貢献するのかを明らかにした点は、高く評価することができる。

第二は、中国の農業・農民問題を、従来の研究（とくに中国国内での研究）にしばしば見られる政策側からの検討ではなく、経済主体（アクター）の側から分析し、かつ、政策部門だけではなく、生産部門、加工部門、流通部門を加えた 4 部門全体として体系的に把握しようとした点も重要である。開放・改革後の中国経済の動向を、中央政府の政策効果の分析に留めるのではなく、企業経営や経営者・労働者の活動にまで踏み込んで分析するのは、現在の中国研究では当然の流れとなっている。しかし、中国農業の研究では必ずしも十分定着していないように思われる。本論文はこの点、生産農家、加工業者、仲買人・食糧流通企業を直接の分析対象としており、市場経済化のもとで中国農業の経済主体（アクター）がどのように変容しているのかについて、新たな情報と視角を提供している。

第三は、本論文が堅実な文献調査と積極的な現地調査（聞き取り調査とアンケート調査）に支えられている点である。例えば第 2 章の中央政府・地域政府の政策の紹介では、既存研究のほか、多数の政策文書、地域レベルでの研究論文が参照されている。また、第 3 章の加工部門、第 4 章の生産部門、第 5 章の流通部門では、著者自身の現地調査の結果がふんだんに利用されており、分析に説得力を与えている。とりわけ、流通部門の「經紀人」の分析は著者独自の貢献度が高く、実際、本論文の一部としてアジア政経学会の学術誌に掲載された「中国のトウモロコシ流通市場における『經紀人』の役割：吉林省の事例」（『アジア研究』第 56 巻第 4 号）は、2011 年度アジア政経学会優秀論文賞に選ばれている。

第四は、本論文に掲載された多数の図表の完成度の高さである。図表の形式とその内容は、研究内容のオリジナリティを具体的に示す指標である。この点、本論文に収録された多数の図表は、他の文献からの孫引きはひとつもなく、それぞれが著者の工夫によって作成されたものである。

以上のような研究上の意義と貢献に対して、本論文が抱える問題点や課題についても、審査の過程で指摘された。主な問題点や課題は次の 3 点である。

第一の問題、そして最も重要な問題は、国際的な農産物生産の価格動向に関連する。著者が事例とする吉林省のトウモロコシ産業が成長を遂げ、しかも生産の増加と農家所得の安定を同時に達成した 2000 年代半ば以降は、原油価格の異常な高騰に牽引されて、コメ、小麦、大豆、トウモロコシなどの国際穀物商品の価格が人為的に上昇を続けた時期と重なっていた。つまり、国内条件ではなく、特殊な国外条件のもとで、吉林省のトウモロコシ産業も相対的に高いトウモロコシ販売価格を享受してきたのである。したがって、この条件が崩れ、トウモロコシの国際価格が崩壊したとき、「トウモロコシ農家の経営安定」という本論文の重要な主張がそのまま維持できるのかどうか、疑問として残る。

第二の問題は、著者が吉林省のトウモロコシ産業の急速な発展を支えた理由として指摘する 2 つの条件、つまり、「多様な選択肢」（代替案を選択する自由）と「競争的な環境」の形成のうち、前者に係る評価である。氏は 2004 年以降の農産物流通自由化体制のもとで、生産農家、加工業者、流通商人のいずれにとっても、「多様な選択肢」が生まれたことがトウモロコシ生産の増加を促したと捉えている。しかし、中央政府がいかに市場経済化を進めたとしても、「社会主義国・中国」の基本的な枠組みは変わっていない。つまり、資本主義経済諸国が保障する「代替案を選択する自由」とは大きく異なっていたはずである。この点、氏はアクターの活動の自由について、過大評価をしているのではないかとの疑問が出された。

第三の問題は、吉林省のトウモロコシ生産の急増、とりわけ単位収量の増加がどのように実現したのかに関する理由の説明部分である。本論文ではもっぱら地域政府の政策と、生産・加工・流通の相互連関の重要性が指摘されているが、トウモロコシ生産の中で進展していた「種子改良」「栽培技術の変化」などの記述が不十分であるとの指摘もなされた。

しかし、こうした点は本論文の学術的意義を大きく損なうものではない。先に述べた4つの研究上の意義と貢献を評価し、2頁目の冒頭で述べたように、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士号（経済学）を授与するのにふさわしいという結論に達した。

末廣 昭（主査）

田嶋俊雄

丸川知雄

高橋昭雄

矢坂雅充